

# エマソンの “Self-Reliance” と スマイルズの “Self-Help” Emerson's Influence on Smiles' *Self-Help*

小田 敦子  
(Atsuko Oda)

Ralph Waldo Emerson (1803-82) の最初のエッセイ *Nature* (1836) が汎神論的と物議をかもし、翌々年の神学部講演での教会批判によってハーバード大学神学部と以後 30 年にわたって決裂しながらも、アメリカで最初の “Public Intellectual” —さまざまな社会階層に属する広範な人々に政治や文化を語ることでできる人—として認められていく過程において、イギリスでの講演旅行から帰国後、1850 年代はエマソンがパブリック・インテレクチュアルとしての地位を確立する時期であった。1866 年にはハーバード大学から法学博士号を授与され、国民的イコンとなるが、彼の印税は 15 年ごとに倍増し続けたということも (Buell 34)、その過程を例証している。同時期にイギリスでは、1857 年に蒸気機関車の父、George Stephenson の伝記で認められた Samuel Smiles (1812-1904) が、ヴィクトリア朝の繁栄を背景に 1859 年には 19 世紀最大のベストセラー、古今様々な社会階級に存在した自助努力で大成した人々の逸話を集めた *Self-Help* を出版し、大衆の啓蒙家として頭角を現してきていた。ともに大衆的人気を得たとはいえ、エマソンの “self-reliance” とスマイルズの “self-help” は以下に述べるように、似て非なるものなので、これまでエマソンのスマイルズへの影響が論じられることはあまりなかったが、<sup>1</sup> David Hume、Adam Smith からエマソンの友人でもある Thomas Carlyle までスコットランド啓蒙思想を共通の先達とするとしても、エマソン自身のスマイルズへの影響は結構大きいのではないかと、エマソンのパブリック・インテレクチュアルとしての魅力がイギリスではどのように受容されたのか、スマイルズの著書から考

えてみたい。

*Self-Help* は 1866 年の改訂版の序文によると、「アメリカでは様々な形で再版され、翻訳がオランダとフランスで出て、もうすぐドイツとデンマークで出るところだ」(v)とアメリカはもちろん各国で人気の書物であった。その人気に報いてか、スマイルズは、*Self-Help* の大成功の後、エマソンからの明示的な引用を含む *Manners* (1871) を出版するが、まず、*Self-Help* の人に内在的な力に頼ることで自立していくという点には明らかにエマソンが代表する個人主義のアメリカ文化の影響があり、“gentleman”に代表される「人格」「character”や「作法」「manners”の獲得を具体的な目標として示し、それを現代的な概念に更新していこうとする点も共通する。*Self-Help* は 1866 年から 68 年にかけて幕府がイギリスに派遣していた中村正直 (敬字 1832-91)による翻訳『西国立志編』(1871)として日本でも出版され、福沢諭吉の『西洋事情』に次ぐ明治の一大ベストセラーとなった。「天ハ自ラ助クルモノヲ助ク」と訳された冒頭の一文は人口に膾炙した。これはギリシア以来の古い格言だが、それを鮮やかに甦らせたのが、まず、Benjamin Franklin であった。エマソンも、スマイルズもそれを変奏したと言える。

God helps them who help themselves. (*Poor Richard's Almanac* 1736 年)

Nature suffers nothing to remain in her kingdoms which cannot help itself.  
 (“Self-Reliance” 272)

Heaven helps those who help themselves. (*Self-Help* 1)

フランクリン自身はキリスト教を重視した人ではなかったが常識的に “God” を使い、スマイルズはさらに宗教、国籍を問わず広い読者に訴える形にしたのに対し、エマソンは神を自然、「人々」をより広く自然の中にあるもの、生物、無生物を問わずと言い換えている点で際立っている。その口調には、ピューリタンの厳しいものがあるが、スマイルズ以上に世俗化へ大きく舵を切った形

## エマソンの “Self-Reliance” とスマイルズの “Self-Help”

になっている。自然の中にあるものはすべて自助、自律する力をもっているとエマソンは自然に基盤をおく世界観を構想している。エマソンは貴族制の国イギリスでの講演のタイトルとして、“Natural Aristocracy”を挙げたが、予想したほどの効果は得られなかった。<sup>2</sup> 古代ギリシア・ローマ以来、共和主義に必要な理想的市民の美德や作法を象徴する「本性上の貴族」という観念を、近くでは、Thomas Jefferson の美德と才能による貴族という概念を踏まえて、さらにそれを「自然の王国」に住む「自然に由来する本性上の貴族」と読み替えている点で、スマイルズと根本的な違いを示す。エマソンの自然観は *Self-Help* と同年 1859 年に『種の起源』の出版が広く公開した進化論的なもので、先端の科学に通じていたエマソンの特質でありながら、パブリック・インテレクチュアルとしてのエマソンが必ずしも伝えきれなかったものでもある。<sup>3</sup> エマソンのこのジレンマを、大衆の啓蒙家として一世を風靡したスマイルズはどう受けとめたか、比較を通して考えてみる。その差が、スマイルズからエマソンへと関心を移した中村正直の軌跡に反映されていることにも触れたい。

### 1 スマイルズの *Self-Help*

スマイルズはエジンバラ大学で医学を修め開業するがそれでは生活できず、1838 年には招かれて *Leeds Times* の編集長になる。1840 年には、エマソンが詩 “The Chartist’s Complaint”でもとり挙げている労働者階級の男性普通選挙権獲得による議会改革を求める Chartism の団体の書記に就任している。1845 年末にリーズ・サースク鉄道が計画され鉄道会社の社員になる。*Self-Help* の初版の序文によると、この頃に労働者が手作りでお互いに読み書きから数学、化学までを教え合う夜間の勉強会に始まる 100 人ほどの互助会から講師を頼まれる。彼らの “the admirable self-helping spirit” (x) に打たれたスマイルズは “Self-Help”を主題に、蒸気機関車の父、George Stephenson の “self-help” と “perseverance” (111)の重要性を例証する話をしたことが成功し、著書に発展していったという。エマソンは 1847 年から 48 年にかけて 10 か月のイギリ

スでの講演旅行で、アメリカ知識人の代表としてイギリスでの評価を確立した。それ以前からエマソンの著作の安価版がイギリスでも出版され、知識人にも労働者にも読まれていた (Buell 34)。スマイルズは *Leeds Times* にエマソンの本の紹介をしており (Trendafilov 10)、後述する著作におけるエマソンからの引用も、“Self-Reliance”をふくむ初期のエッセイから 1870 年出版の *Society and Solitude* にまで及び、生涯の読者であったことがわかる。エマソンの 1847-48 年にかけての講演旅行は労働者啓蒙団体に招かれたもので、リーズ、シェフィールドなどイギリス中部の工業都市にも長く滞在しており、講演内容が新聞報道されることも多かったので、スマイルズが講演者としてのエマソンを見聞きしていた可能性も高い。

*Self-Help* には明示的なエマソンへの直接の言及は見られないが、フランクリンやユニテリアンのカリスマ牧師、William Ellery Channing (1780-1842) への言及は散見される。エマソンに大きな影響を与えたチャニングの最も先鋭な講演 “Humanity’s Likeness to God” (1828) が代表するような人間の善性への信頼は、人々を抑圧的なカルヴァン主義から解放し、人に内在的な力を信頼する方向へと導き、その力を涵養するための “self-culture” の必要性を教えた。それが牧師を辞した後のエマソンに講演の機会を提供したアメリカの Lyceum 運動の思想的なバックボーンとしてあった。チャニングは 1839 年にはボストンで労働者を対象に “Self-Culture” の題で 3 回連続講演を行い、その観念を説明することから始め、最後に今の時代の幸福な特徴として、大衆が「知性、自尊心、様々な生活の安楽」 (Channing 55) の面で進歩したことをあげ、「個人」として重要性をもつ時代にふさわしい人であることを勧めてこう言う。

Awake! Resolve earnestly on self-culture. Make yourself worthy of your free institutions, and strengthen and perpetuate them by your intelligence and your virtues. (57)

誰かの奴隷にされたり、機械の部品にされたりすることのない個人を重んじる

## エマソンの“Self-Reliance”とスマイルズの“Self-Help”

「自由な制度」と共にあるための「自己修養」は、独立革命後のアメリカを支える市民の美德を奨励する点で、イギリスの労働者教育における“self-help”をより精神的なものにする。チャニングにとっては、「義務」の観念は「公正無私な正義」と「普遍的な善意」(12)に対するものであり、それを体現する神を信頼する精神を育てるという宗教的な性格が強い。これはまさにカルヴァン主義の伝統、ピューリタンの父祖たちがアメリカに実現しようとした神政の伝統と言えよう。前述のように、エマソンの“Self-Help”の格言の変奏にも、カルヴィニスト的厳しさが残っていたが、チャニングのエマソンへの影響を論じた David Robinson はエマソンを“Apostle of Culture”と呼んだ。共同体よりは個人に重きを置く自由な制度のための人格の完成は、エマソンがチャニングから受け継いだものだ。

19世紀のアメリカ、イギリスにおける労働者教育組織の目的は、産業革命に伴う技術の進化に追いつくための熟練工のための科学教育から始まって、次第に一般労働者を自由主義的“self-help”の思想により倫理的、精神的に向上させることへと焦点を移動させていった(Sly 16)。その変化の時代にエマソンやスマイルズは活躍した。*Self-Help* は前出の有名な格言に続いて、以下のように個人の成長が国の成長の礎であることを語る。

The spirit of self-help is the root of all genuine growth in the individual; and, exhibited in the lives of many, it constitutes the true source of national vigour and strength. Help from without is often enfeebling in its effects, but help from within invariably invigorates. Whatever is done for men or classes, to a certain extent takes away the stimulus and necessity of doing for themselves; and where men are subjected to over-guidance and over-government, the inevitable tendency is to render them comparatively helpless. (1)

スマイルズ自身も、個々人が勤勉に “self-culture, self-discipline, and self-

control”に励むことは「義務」であるという考えは、ソロモンの格言にもあると言うように(x-xi)、新しい考えではない。当時はイギリス自由主義社会の倫理として、支配層も大衆の教化のため歓迎する教訓であろう。そうして自分自身の力を強化するという主張を励ましたのが、自由放任主義の経済思想の要請であったことは間違いないにしても、庶民の教化のお手本としてのアメリカという例、アメリカだけでなく、イギリスでも広く読まれたチャニングが勧める“self-culture”であり、宗教界のイコノクラストであるエマソンの“self-reliance”の隆盛であった可能性は高い。

エマソンの新感覚の言葉には飛びつかず、スマイルズは“self-reliance”という言葉で Francis Bacon(22) や William Wordsworth(28)など、まず、イギリスの伝統から学ぶべきものとして提示する。伝記により偉大な先達から学ぶべきものとして、フランクリンが Cotton Mather の “Essays to do Good” から学んだことに言及するなど(437)、代表的アメリカ人のピューリタニズムの精神の影響にも触れているが、深くその精神に注意することはなく、一般的に、自分の力を恃むという意味で使っている。チャニングの “self-culture”についても同様に、スマイルズの第 11 章 “Self-Culture—Facilities and Difficulties”では、教育にも関心を持っていたチャニングだが、「健康な身体」の必要を擁護するものとして引用する。<sup>4</sup>

It is perhaps to the neglect of physical exercise that we find amongst students so frequent a tendency toward discontent, unhappiness, inaction, and reverie,—displaying itself in contempt for real life and disgust at the beaten tracks of men,—a tendency which in England has been called Byronism, and in Germany Wertherism. Dr. Channing noted the same growth in America, which led him to make the remark, that “too many of our young men grow up in a school of despair.” The only remedy for this green-sickness in youth is physical exercise—action, work, and bodily occupation. (372-73)

チャニングが重視した善性を備えた個人の精神の成長は単純化され、社会に有用で効率的な体制順応的な成長を奨励するスマイルズの脈絡に回収されている。もちろん、スマイルズも“self-culture”に精神的な性質がなければならないと認めているが (390)、それはエマソンが *Nature* の中で、「感覚と悟性のイギリス、神秘思想と夢想のドイツ」(15)と特徴づけたようなイギリス精神、実利的な目標があり、獲得されるべき精神の習慣としての、最大多数の最大幸福の効率的な実現を求める世俗的な“self-help”を説明するものだ。

イギリスを訪問したエマソンは、当時のイギリスでは 40%が自分の名前も書けない文盲であり、その貧富の差、教養の格差に衝撃を受け、厳しい批判の目を向けている (Richardson 442)。スマイルズの議論がそのような読者のために単純化を故意に選んでいる面はあるだろうが、論の基調は変わらないだろう。イギリスの聴衆の実利性について共感はしないが、感嘆の念を深めているとエマソンは Margaret Fuller への手紙に記したが (Cabot II 555)、帰国後の講演でもこう述べている。

The Englishman stands in awe of a fact as something final and irreversible, and confines his thoughts and his aspirations to the means of dealing with it to advantage; he does not seek to comprehend it, but only to utilize it for enjoyment or display, at any rate to adapt himself to it; .... He admires talent and is careless of ideas. The English have no higher heaven than Fate. (Cabot II 555-56)

ここでエマソンが “ideas” で意味しているのは、“self-culture”によって “self-reliance” に到達しようとする内在的な力が何かを問うことであり、イギリスでの講演のために考えた “Natural Aristocracy” や、“A Natural History of Intellect” というテーマが示すように、人間社会に留まらず、自然を視野に入れて人間の精神を考えることであった。しかし、Carlyle の妻、Jane が辟易して書いているように、エマソンの自然への言及は揶揄の対象にしかなく (Bosco & Myerson 31)。ましてや、スマイルズとその読者がそのようなエマソ

ンを受けとめたわけではない。産業化の弊害に対して、カーライルには過去の田園生活に向かう面があったのに対し、スマイルズは未来志向、産業化、都市化された社会を前提として考えることを選んでいた (Jarvis 31)。

エマソン晩年のハーバードでの講演シリーズ、“Natural History of Intellect”はこのイギリスでの講演に遡る (Cabot II 560) ことが示すように、「自然」と精神との関係はエマソン終生の論点で、アメリカの特徴を表すものでもあるが、アメリカの聴衆にも理解されていたわけではない。しかし、エマソンほかアメリカの超絶主義者たちの講演は、社会の支配層の慈善の押し付けが含まれるスマイルズ的な”Self-Help”に反対しており、“Self-Reliance”は自分たちの中に「助け」を見つける必要を、社会が構築したものに固執するのではなくそれを破り自身の成功を目指すことを教えているということは認識されていた (Sly 25)。それがエマソンの場合は、自然の力を知ることだった。イギリス人からアメリカについて尋ねられたエマソンの反応、アメリカに帰国したときにエマソンが感じた空気は、エマソンに独特のものであろう。

The merits of America were not presentable. The tristesse of the landscape, the quiet stealing in of nature like a religion, how could that be told?” (Richardson, 460)

アメリカの宗教的な空気は、普通、ニューイングランドの内省的なカルヴァン主義の培った風土と考えられるだろう。「自然が宗教に代わって忍び入る」空気感に、エマソン独自の精神性が表れている。「悲しみ」というフランス語はショパンの練習曲への言及、エマソンがロンドンで聞いたショパンのコンサートの思い出だろうか。自然を音楽のように言葉で捉えがたいものとして共感している点については、Santayana が音楽や風景に逃避する“genteel tradition”と批判したが(Santayana 11)、彼も注目したエマソンの「自然への愛と尊敬」(Santayana 11)には前述のエマソンの「自然の王国」の厳格さを考えると別の解釈もあろうが、“genteel”と誤解される可能性は大いにある。後述するスマイルズも“genteel”なものとしてエマソンを利用した節がある。煤煙のため



に羊が皆黒いとエマソンを呆れさせた、産業都市化に沸くイギリス体験を経て (Richardson 441)、*Nature* が *Nature; Addresses and Lectures* (1849) として再版されるこの時期、エマソンはニューイングランドの自然に対する意識をより先鋭にしていたことは確かだ。

## 2 スマイルズの *Character*

*Self-Help* の最終章は “Character—The True Gentleman” で終わる。自助努力による「人生の王冠であり栄光は人格だ」(449)、それは「富以上に力を行使用する」(449)が、その特徴の一つは他者への優美な振る舞いにある(460)と述べ、「紳士」という目標を挙げる。身分社会のイギリスでは、「紳士」は成功の象徴であるが誰でもなれるものではない。スマイルズはこの点では、貴族をよりエマソンのように、俗物主義ではなく「内在的な力」として価値づけ、誰にでも達成可能な目標として提示できる「紳士」に注目したのではないか。そこには、共和国の統治に必要な「本性上の貴族」を増やす、それ以上に、脅威となるような下層民を教化するという支配の論理もあるが、そのためにも、エマソンが「普通の人」のために考えた “Natural Aristocracy” 「自然に由来する本性上の貴族」が有効になる。スマイルズの、いわゆるオーラを発する紳士の描写は以下のように珍しく抒情的で、エマソンの影響が認められる。

As daylight can be seen through very small holes, so little things will illustrate a person's character—he can be civil and kind, if he will, though he have not a penny in his purse. Gentleness in society is like the silent influence of light, which gives colour to all nature; it is far more powerful than loudness of force, and far more fruitful. It pushes its way quietly and persistently, like the tiniest daffodil in spring, which raises the clod and thrusts it aside by the simple persistency of growing. (460)

引用の最後のワーズワースの詩で有名な花、「水仙」の比喩は、エマソンが “He

who would help himself and others, should not be a subject of irregular and interrupted impulse of virtue”と“self-help”に明示的な言及をする講演記録、“Man the Reformer”の一節に想を得ているだろう。上の引用の直前でエマソンは、季節は秋、自然の“the power of kindness”を微細な観察力で描いている。

Have you not seen in the woods, in a late autumn morning, a poor fungus or mushroom, — a plant without any solidity, nay, that seemed nothing but a soft mush or jelly, — by its constant, total, and inconceivably gentle pushing, manage to break its way up through the frosty ground and actually to lift a hard crust on its head? It is the symbol of the power of kindness. (149)

エマソンは「自然の王国」で、進化の初期の段階で現れた植物たちが周りの自然の優しい助けを借りて成長するところに発揮される「同種の親切の力」が人間の世界にも適用されないのか、それを適用できる「精神の世界と実際の世界との仲介者」(149)である「改革者である人間」が現れないのかと問いかけている。そのような人が自然と同じ“gentle”で“kind”な精神だと、自然と人間とを同じものとして説明する。エマソンの“self-help”は「自然の王国」には「同一性」による有機的なつながりがあることを前提としているため、“self-help”は“himself and others”を救うことになり、それが自然の「法」に則ることだと考えている。その結果、人格を陶冶した人には自然が味方し、アラブの詩人の言葉を借りれば「冬の日の/太陽だ、彼は」(149)、つまり、エマソンが“compensation”と呼ぶ均衡をとろうとする自然の光や風を感じさせる存在になる。光が神的なものに例えられるのは、普遍的に見られるが、スマイルズを刺激したのはエマソンの著作であったし、明確な記録はないが、実際に見聞きしたエマソンのイギリスでの講演であったのではないだろうか。

エマソンの人気は講演によって高まり、その人気は彼の character に支えられている、聴衆は話の内容と合致した彼の放つ雰囲気と説得されているとはアメリカでも多くの人の感じたことであった。Henry James, Sr.がその点を端的

に指摘した言葉を、Cornel West が自身の著書の冒頭で引用している。

Mr. Emerson’s authority to the imagination consists, not in his culture, not in his science, but all simply in himself, in the form of his natural personality. (9-10).

エマソンの講演が、“self-culture”を語り、時代に先んじた進化論的な自然観をはじめとした科学的なものの見方の重要性を語るものであったが、人々がよく理解したのは、飾り気のない「自然な人柄」だったという。イギリスでの反応についても、エマソンに偏見をもっていた以下のイギリス人の感想は、聴衆がどのようにエマソンに魅了されていくかという典型例であろう。エマソンその人の魅力は造作の奇妙な顔の表情にも表れていて、“a combination of intelligence and sweetness that quite disarmed me”、“*sui generis*”、「独特」で会って見ないとよさがわからない人、“His influence is of an evasive sort”と感じさせる魅力が伝えられている(Cabot II 561)。エマソンの「自然な人柄」を目にすることが彼の語る「自然な本性上の貴族」というテーマの理解を大いに助けていたことが推測される。アメリカの特徴を「自然が宗教のように忍び入る」と言ったように、エマソンは伝えようとする微妙な自然の影響力を、“character”とか“manners”と呼ぶことで、人々が涵養することのできるものしようとした。普通の人々のための“Natural Aristocracy”を体現したかのようなアメリカ人の存在が、スマイルズに *Self-Help* を書かせる大きな誘因になったことは、その後、1971年にスマイルズが発表した次作、1971年に発表した *Character* でより明らかになる。

*Character* は、*Self-Help* と同趣向、自助努力の人間性において優れた人々の逸話を集めたもので、日本ではやはり中村正直が『西洋品行論』(1878)として翻訳出版した。*Self-Help* がとりあげたような偉業を達成できない人々にも可能な手本として、スマイルズは *Character* を示した。この本には、エマソンの *Essays: Second Series* (1844) 中のエッセイ、“Character”からの引用が開巻第1章の題辞に使われる他、同書から“Manners”、初期の講演“The

Method of Nature”(1841)や *Essays: First Series* (1841) から“Self-Reliance”に “Love”、発売されたばかりの *Society and Solitude* (1870)から “Courage” など明示的にエマソンが登場する。スマイルズがエマソンの人格から受けた影響を素直に告白したような体裁となっている。

*Character* の第 1 章“*Influence of Character*” の題辞はエマソンの“*Character*”の一節が使われている。そのエマソンの原文を省略された部分とともに見てみると、スマイルズの題辞は、以下のように始まる長い段落の中の 1 文と最後の 1 文が抜粋されていることがわかる。

This [character] is a natural power, like light and heat, and all nature coöperates with it. .... All individual natures stand in a scale, according to the purity of this element [Truth] in them. The will of the pure runs down from them into other natures, as water runs down from a higher into a lower vessel. This natural force is no more to be withstood, than any other natural force. .... Character is this moral order seen through the medium of an individual nature. .... He is thus the medium of the highest influence to all who are not on the same level. Thus, men of character are the conscience of the society to which they belong. (498)  
(下線部はスマイルズの引用した部分を示す。)

この引用の冒頭と前述の *Self-Help* 最終章、“*Character*”からの引用との類似は、*Self-Help*においてスマイルズはエマソンに言及はしなかったが、前作においても明らかにエマソンを参考にしていて示している。スマイルズは“character is power” (452) とより一般的な形で述べ、また、John Locke の“*tabula rasa*”に従い獲得される資質と考え、エマソンのように“a natural power”とは言わなかったが、*Character*からのこの引用では、光などの自然に触れる部分は全く採用していない。反対にエマソンは、水が低きに流れる例をあげて“natural force”と言い換え、「生まれ持った」と同時に「自然の」力であることを強調しているのだが、スマイルズは、今回、そこは無視した。

この第 1 章では、“Self-Reliance”からの一節をスマイルズが記憶した形で引用している。

Emerson has said that every institution is to be regarded as but lengthened shadow of some great man: as Islamism of Mahomet.... (16)

エマソンの原文は “An institution is the lengthened shadow of one man.”(267)で、この「ある一人の人」は「真実の人」であり、いわゆる「偉大」ということにはなるのだが、普通の人の上に立つ者ではない。エマソンは「彼のいるところ、自然がある」(16)というように、自然に存在する平等な自助の力が考慮されないと、スマイルズがこの引用の前に引いているカーライルの英雄論、世界の歴史は「偉大な人の歴史だ」の流れに乗ってしまうことになる。人格は偉大な人だけのものではないと考えるスマイルズは、カーライルよりエマソンに近い民主主義者であり、普通の人のための“self-reliance”をエマソンから継承しようとしている。

第 9 章 “Manner—Art” という題は、エマソンのエッセイ “Manners”の一節から取られ、それが題辞にも採用されている。

High behavior is as rare in fiction, as it is in fact....Once or twice in a lifetime we are permitted to enjoy the charm of noble manners, in the presence of a man or woman who have no bar in their nature, but whose character emanates freely in their word and gesture. A beautiful form is better than a beautiful face; a beautiful behavior is better than a beautiful form: it gives a higher pleasure than statues or pictures; it is the finest of the fine arts. (528-29) (下線部はスマイルズの引用した部分を示す。)

スマイルズは “Good manners consist, for the most part, in courteousness and kindness.”(*Character* 185)と述べながら、作法の形骸化の危険性を指摘して、エマソンの引用の妥当性に認めるのだが、ここでも、“kindness”が自然に

由来することは無視され、皮相的な人間界の社交の問題になり、エマソンの「自然の王国」への意識はない。自然が人格を装飾する比喻にとどまるなら、エマソンが自然に託す抒情性はサンタヤーナが批判する「お上品な伝統」の礼儀正しきでしかない。“Character”の中でエマソンは自然が公認する“natural merchant”(496)を仮定して、自然は実際には取引するのは難しい相手だが、以下のように、自然との関わりの必要性を述べる。

The habit of his mind is a reference to standards of natural equity and public advantage .... I see, with the pride of art, and skill of masterly arithmetic and power of remote combination, the consciousness of being an agent and playfellow of the original laws of the world. (497)

「人間の精神の習慣は自然の均衡と公共的な利益という基準を参考にする」と言うように、エマソンの“natural aristocracy”には、「世界の原初的な法」を科学的に再考し、それに基づく人間の作法を考える視点があったが、そこに注目されることはアメリカでも少なかった。ニューイングランドの宗教的な雰囲気、宗教が自然に取って代わられることを望まなかった、エマソンを“genteel tradition”として受容することを望んだということだろう。ましてや、“The Gospel of Self-Help”、“Samuel Smiles’ Communion of Engineering Saints”という揶揄が本質をついている(Jarvis 92)、宗教に関心を持たない世俗的な人格の完成を考えるスマイルズは関心を持たなかったが、それでも意外に、エマソンのキーワードだけでなく、自然の捉え方に反応している部分が確認できた。エマソンの言う「世界の原初の法則」に関心を持ったのが、スマイルズの訳者、中村正直であったことに最後に触れて、結びとしたい。

### 3 中村正直のエマソン翻訳「報償論」

敬宇中村正直は幕府の儒者であったが、蘭学、英語にも通じ、1866年に幕府の遣英留学生 12 名の取締としてロンドンに行き、外務大臣の好意により黄金

時代のヴィクトリア朝を見学する機会を得、そこに理想郷を見た(高橋 45)。1868年、大政奉還のために中途帰国を余儀なくされるが、その際、イギリス人の友人が贈ったのが *Self-Help* であった。中村は渡英を志望した動機の一つに「性霊の学即形而上の学、物質の学即形而下の学」という学問の二分法を挙げ、前者への強い関心を表明した点において、蘭学者の洋学観とは異なり、当時の日本で際立った存在であった(高橋 36-39)。それだけに *Self-Help* についても、“self-respect”、“self-reliance”、“confidence”を終始称揚し、国力の源は個人の自助の精神であり、人々の「品行」即ち紳士的な人格にあるというスマイルズの考えにこそ説得され、その翻訳に意味を見出した。スマイルズの『西国立志編』に続いて、翌年、1872年には、J. S. Mill の翻訳『自由之理』を出すなど、中村は目覚ましい勢いでキリスト教からイギリスの現代思潮までを咀嚼しようと努めた。西郷隆盛の言葉として知られている「敬天愛人」は、漢学者であった中村が『西国立志編』を訳す過程で、偉人たちの「天ヲ敬シ人ヲ愛スルノ誠意」を解明するために作った言葉であった(高橋 66)。また、「敬字」という号は、*Self-Help* を繰り返し読んでいた帰国の船上で思いついたものだ(平川 42)。「敬天愛人」との関係が推測できるが、スマイルズの冒頭の一句、「天ハ自ら」を「自然は」と言い換え、自然を宇宙規模で考えていたエマソンへの連想も働く。

実際、中村は後年、エマソンを愛し、1888年にはエマソンの *Essays: First Series* (1841) 所収の代表的エッセイ“Compensation”の日本で最初の翻訳「報償論」を発表している。それ以前、スマイルズの *Character* (1871) の翻訳を1878年に出版しているが、1873年の明六社の結成に加わり、西洋からの知見の普及に努めていたので、他にもエマソンを知る機会があったかもしれない。1883年にカナダ・メソジスト教会での集会で講演をした中村について「日本のエマソンたる真価を発揮」と書かれていることから(高橋 224)、中村の関心はスマイルズから間もなくエマソンへ移っていったことがうかがえる。『学士院雑誌』に演説原稿として掲載された「報償論」の訳には序論が付され、そこで中村は翻訳が非常に難しかったと語っている。スマイルズの本の翻訳の速さと

比べれば違いは明らかだ。それでも諦めなかった理由として、キリスト教の善悪の来世での応報の考え方への違和感に対して、「亜米利加人エメルソン氏ノ報償論ヲ得タリ」、エマソンは、現世のみにて見られるべき善悪の報償を宇宙間の実証を挙げて着実に論じていることを指摘し(中村 335)、エマソンの形而上学のこの世的、物質的側面への共感を語っている。中村は一度はカナダ=メソジスト派で受洗するが、晩年にユニテリアン雑誌に寄稿した文章からは、「古聖の所謂上帝、即ち一の主宰あるを信ずるに止どまれども」(高橋 240)と述べているように、キリスト教の信仰をもっていたとも言えない。その点でも、エマソンに共感するところがあっただろう。

人が善をなすことは「英語ノ所謂ゼウィルヲフゴード」でそれを保障する報償の法則を「自然の天則」(中村 334)と言った中村敬字は、エマソンの同時代人の中でもスマイルズ以上に有望な読者であったと言える。「至小不可忽」と敬字が小見出しを付けた“Compensation”の一節、原文は以下の通りだ。

The world globes itself in a drop of dew. The microscope cannot find the animalcule which is less perfect for being little.... So do we put our life into every act. The true doctrine of omnipresence is, that God re-appears with all his parts in every moss and cobweb. The value of the universe contrives to throw itself into every point. If the good is there, so is the evil; if the affinity, so the repulsion; if the force, so the limitation. (289)

どんな小さなものにも神の力が宿り、それが“self-reliance”の根拠であること、同様に、善をなすことは、結果的に報償を得るとしても、報償のためではなく、「自然の王国」の法則により自然に善をなすものなのだ、“kindness”というモラル(精神性)の支配する宇宙を構想したエマソンに、中村はより説得力のある“self-help”の必然性を見出した。スマイルズが拾って落としたエマソンをスマイルズの訳者中村が拾ったというのは順当な巡り合わせであった。受け継がれていくべき課題だろう。



注

1. Vladimir Trendafilov, “The Origins of Self-Help: Samuel Smiles and the Formative Influences on an Ex-Seminal Work,” *The Victorian* 3.1, January 2015. 同書に引用された Alexander Tyrrell の *Class Consciousness in Early Victorian Britain: Samuel Smiles, Leeds Politics, and the Self-Help Creed*, Hartford, CT: Conference on British Studies, 1970 が William Ellery Channing と Emerson の影響を論じたことを紹介しているが、Trendafilov は Thomas Carlyle から *Leeds Times* の Smiles 以前の編集者までを挙げて、彼らが self-help という言葉の初出だとして反証している。
2. “Natural Aristocracy” はエマソンの死後になってはじめて、*Lectures and Biographical Sketches* (1884)に収録された。それは生涯エマソンが繰り返していた重要な講演であることを示している (Richardson 447)。
3. この点については拙稿「エマソンの『歴史』と『自然史』」(三重大学 *Philologia* 第47巻 2016 pp. 41-51)、「*The Conduct of Life*におけるエマソンの自然観」(三重大学 *Philologia* 第48巻 2017 pp. 37-53)で論じた。
4. スマイルズが最初に出版した著書は、*Physical Education: or the Nurture and Management of Children* (1838)で、医師として幼児死亡率の高さを “unnatural” と批判し、貧困と衛生状態の悪さを原因として挙げている (Jarvis 34)。健康はスマイルズの重要な関心であった。

引用文献/参考文献

- Buell, Lawrence. *Emerson*. Cambridge, Mass.: Harvard UP, 2003.
- Bosco, Ronald A & Joel Myerson, eds. *Emerson in His Own Time*. Iowa City: U of Iowa P, 2003.
- Cabot, James Elliot. *A Memoir of Ralph Waldo Emerson*. 2 vols. Houghton Mifflin, 1895.
- Channing, William E. *Self-Culture*. James Munroe, 1839.
- Emerson, Ralph Waldo. *The Journals and Miscellaneous Notebooks of Ralph Waldo Emerson*. 16 vols. Ed. William H. Gilman, Alfred R. Ferguson, George P. Clark, et al. Cambridge: Harvard UP, 1960-82.
- . *The Later Lectures of Ralph Waldo Emerson*. 2 vols. Edited by Ronald A. Bosco & Joel U of Georgia P, 2001.
- . *Ralph Waldo Emerson: Essays and Poems*, edited by Joel Porte, Harold Bloom and Paul Kane. Library of America, 1996
- Jarvis, Adrian. *Samuel Smiles and the Construction of Victorian Values*. Sutton

- Publishing, 1997.
- Jugaku, Bunsho. *A Bibliography of Ralph Waldo Emerson in Japan from 1878 to 1935*. Sunward P, 1947.
- Richardson, Robert D. *Emerson: The Mind on Fire: A Biography*. U of California P, 1995.
- Robinson, David. *Apostle of Culture: Emerson as Preacher and Lecturer*. U of Pennsylvania P, 1982.
- Sly, Jordan S. "Improve the Moment: Mechanics' Institute and the Culture of Improvement in the Nineteenth-Century." *Libraries-Traditions and Innovations: Papers from the Library History Seminar XIII*, edited by Melanie A. Kimball and Katherine M. Wisser. De Gruyter Saur, 2017.
- Santayana, George. *The Genteel Tradition in American Philosophy and Character and Opinion in the United States*, edited by James Seaton. Yale UP, 2009.,
- Smiles, Samuel. *Character*. [biblioteca.org.ar/libros/167770](http://biblioteca.org.ar/libros/167770).
- . *Self-Help with Illustrations of Conduct and Perseverance*. John Murray, 1916.
- Trendafilov, Vladimir. "The Origins of *Self-Help*: Samuel Smiles and the Formative Influences on an Ex-Seminal Work." *The Victorian* 3.1, January 2015, pp. 2-16.
- West, Cornel. *The American Evasion of Philosophy: A Genealogy of Pragmatism*. U of Wisconsin P, 1989.
- 高橋昌郎『中村敬字』人物叢書新装版 吉川弘文館 1988
- 中村正直「報償論」 大久保利謙編『明治啓蒙思想集』明治文学全集 3 筑摩書房 1967
- 平川祐弘『天ハ自ラ助クルモノヲ助クー中村正直と『西国立志編』』2006

本稿は JSPS 科研費 18K00413 の助成を受けた研究成果の一部である。